

年少者日本語教育研究の最近の動向と課題（2000年～2007年）

・ ボランティア支援者の立場からの問題提起

松本 恭子

（南山国際高等学校・中学校，南山大学大学院生）

はじめに

本発表では、年少者日本語教育の最近の動向を整理し、2000年以降の研究の流れを概観しながら、現在抱えていると思われる課題をボランティア支援者の立場から考察する。

筆者は、1996年から2005年まで、名古屋市内の小中学校で日本語支援を行っていた。その際、多様な児童に対応するために、それまでの研究の知見を支援活動に応用していた。それをまとめたのが松本(2004)である。近年特に変化が著しくなり、複雑化しているため、松本(2004)で指摘した課題を再度確認し、本発表では動向の変化と新たな課題を3点指摘する。また、長期的な視点に立った支援を再度強調したい。

また今回は、学校で必要な言語能力の枠組みを元に、指導方針に関わる研究を分類してみた。膨大な研究の中から自分の担当する児童生徒のために役立つ研究は何かを見極める時に、参考にしていただければ幸いである。

先行研究

松本(2004)では、1970年代から2004年までの年少者日本語教育の動向と課題を、ボランティア支援者の立場から整理した。そこでは研究の年代別概観と6つの課題を指摘した。

2000年から2007年までの研究の流れ：概要と理念・指導方針（資料参照）

【第5期：2000年～2002年】

- ・ 概要と現状の問題：日本語教育学会(2000) ・ 地域社会の年少者日本語教育現状と課題：野山(2000)
- ・ 日本語力測定のための試み：カナダ日本語教育振興会 OBC プロジェクト(2000)、中島(2001)、
中島・ヌナス(2001)、岡崎(2002)、伊東・他(2000)、伊東(2002)

【第6期：2003年～2007年】

- ・ 学校教育での不十分な日本語指導の指摘とその原因：山本(2003)
- ・ 教育観の変容「学びの活性化」：宇都宮(2003) ・ 中学生の日本語教育の枠組み：埋橋(2004)
- ・ 多言語多文化主義と子どもの教育問題：山田(2004, 2007)
- ・ JSL バンドスケールと言語能力観：川上(2003a, 2003b, 2004, 2005a, 2005b, 2005c, 2007)、川上編(2006)
- ・ 現場の知見からでた日本語能力判定基準表(学校で必要な日本語)：田中(2007)
- ・ バイリンガル会話力の習得と JSL の直面する課題：中島(2005) ・ バイリンガル読書力の測定：中島(2006)
- ・ 「JSL カリキュラム」：文部科学省(2003, 2005, 2007)

- ・日本語学習と母語学習のネットワーク化：岡崎(2004, 2005)
- ・年少者日本語教育の課題：岡崎 眸(2005b) ・共生言語としての日本語学習：岡崎 眸(2005a)
- ・年少者日本語教育学：川上他(2004)、川上(2004)、齋藤他(2005)、石井(2006)、野山他(2006)、石井他(2007)
- ・多文化共生社会と年少者日本語支援のあらたな展望：渡辺(2005)、関口(2005)、金子(2005)、岡崎 眸(2005c)、齋藤(2005a)、山田(2005)
- ・「生活者としての外国人への日本語教育」の中の年少者教育：大森(2007)、稲岡(2007)
- ・バイリンガル教育、母語保持、日本の現状：湯川(2006)、齋藤(2005c)
- ・ダブルリミテッド・一時的セミリンガル現象：中島(2007)、生田(2007)、高橋(2007)、滑川(2007)
- ・マイノリティ自身が行っている母語継承語教育の現状：松本一子(2005) ・自然習得との関係：池上(2005)
- ・海外での多言語多文化教育からの示唆：パトラー(2003, 2006)、スペイン・ブラウン・萩野(2006)
- ・地域における年少者日本語教育の現状：厚生労働省(子ども家庭総合研究事業)(2004)、川上・市瀬(2005)、平高(2005)、楊・他(2005)、伊藤(2007)、ヤン・佐藤(2007)、五十嵐(2008)
- ・「外国人生徒のための授業づくり」の実践記録と学校文化の問い直し：清水・児島編著(2006)
- ・第二言語習得研究からの研究方法への示唆：柴山(2006)、小柳(2006)、池上(2006)、齋藤恵(2006)

学校で必要となる言語能力の枠組みから見た指導方針に関わる研究

研究	L1		L2	
	BICS	CALP	BICS	CALP
BICS語彙 縫部(1999)				
カリキュラムガイドラインと 評価 東外大(1998)、伊東(2002)				
JSLカリキュラム 文科省(2005,2007)				
教科・母語・日本語相互育 成モデル 岡崎敏雄(1997)				
JSLバンドスケール 川上(2003a)他				
OBC会話カテスト カナダ日本語教育振興会 OBCプロジェクト(2000)				
バイリンガル読書カテスト 中島(2006)				
日本語能力判定基準表 田中(2007)				

課題の検討と新たな課題

1. いろいろな場面での年少者の日本語使用実態基礎研究
 - 人間関係の構築という社会的な視点での質的研究
 - 教室内インターアクションの「スキャフォールディング」の面からの分析
 - 年少者の日本語使用実態を具体的に明らかにした研究はまだ少ない。
2. 非漢字圏児童・生徒の漢字学習の実態

漢字学習で何が問題なのかを調べた研究：吉川(2004)
3. 知的発達を促す作文指導:「書く力」の再考、学びの力との関係

- 書く力や学びの力と関連させた議論 書くことの重要さや時間がかかること
- 「意味のある場面」で書く力を使うことが大切

4. 教科指導（日本語指導者や母語指導員の教え方研修も含む）

JSL カリキュラム、カリキュラムガイドラインの算数・理科の語彙・文型

5. 長期的な視点にたった体系的な指導方針作成 年少者日本語教育学、学力保障

6. 学校現場で簡単に使える日本語力評価 「日本語指導が必要な児童生徒のチェックリスト」(豊橋市教育委員会：<http://www.gaikoku.toyohashi.ed.jp/index.htm>)

*最初に子どもの実態をつかむために、簡単にできる評価が必要である。

さらに、新しい課題として以下の3点を指摘したい。

- (1) 様々な研究が発表されているが、それらの研究成果の学校教育現場での活用はまだ不十分である。
- (2) 母語も日本語も不十分なJSL児童の存在が問題になっており、特別支援教育の必要な児童も増加している(五十嵐 2008)。
- (3) 集住地域での教育体制は整備されつつあるが、他の地域では初期指導からの問題も指摘されていて、支援に地域格差が見られる(川上・市瀬 2005; 伊藤 2007)。

年少者日本語学習者の「人としての発達」を支援するための言語的支援には、学校現場での日本語教育や母語教育への理解、教員への日本語教育研修、教材情報へのアクセス体制の確立、日本語指導カリキュラム、分かりやすい日本語力診断テストが緊急に必要である。これらを総合して、長期的展望で「学ぶ力」の育成のための支援も緊急に行われるべきである。なお、長期的展望で「学ぶ力」を育成する必要性は、石井他(2007)でも提起され、リテラシー教育の視点の応用が提案されている。

まとめ

本発表では、2000年から2007年までの年少者日本語教育研究の流れを整理し、松本(2004)の6つの課題を再検討した。さらに、新しい課題として以下の3点を指摘した。

- (1) 研究成果の学校教育現場での活用
- (2) 母語も日本語も不十分なJSL児童の存在
- (3) 支援の地域格差

また、長期的展望の日本語支援を組み込む必要性を再度提案した。

・お詫び：大変申し訳ありません。参考文献表は紙面の関係上掲載できませんでした。

なお、2003年までの研究を整理した松本(2004)は以下のURLにあります。

http://www.kikokusha-center.or.jp/resource/new-resource_f.htm/ (2008.4.26 取得)

・この発表の参考文献表をご希望の方は、お手数ですがメールで以下までお知らせください。添付ファイルで送らせていただきます。

(E-mail: d07h1001@nanzan-u.ac.jp)

資料：年少者日本語教育の流れ

